

特集 2

檀家制度の歴史と変遷
ーこれからのお寺と新たな弔いの姿ー

佐々木 閑 Sasaki Shizuka 花園大学文学部特別教授 博士(文学)

専門はインド仏教学、仏教哲学、仏教僧団史。2022年花園大学文学部教授を定年退職後、現職。日本印度学仏教学会賞、鈴木学術財団特別賞受賞。近著に、『人生後半、そろそろ仏教にふれよう』(古舘伊知郎氏との共著、PHP新書2024年)、『世界史のリテラシー 仏教は、いかんして多様化したか 部派仏教の成立』(NHK出版2025年)など



はじめに

遠く離れた場所にあるお寺の檀家^{だんか}を引き継ぎ、この先、家のお墓をどうするか思案されている方も多いのではないのでしょうか。

檀家制度や家の墓の歴史と変遷を振り返り、現代的な視点からの課題を述べるとともに、これからの寺院や僧侶との関係、祖先祭祀^{さいし}の考え方について解説したいと思います。

本末制度・檀家制度とは

江戸期に至るまでの仏教界は、権力と結びついて宗派の影響力を拡大する覇権争いを繰り返してきました。江戸時代に入ると、幕府はあらゆる体制・権力の一元化を図り、安定した権力体制を作ろうとしました。さらに、キリスト教という、日本の権力を根本的に覆してしまうような西洋宗教の流入を防ごうとしました。こうした2つの要因を背景に、幕府は全仏教界を統括し、平和裡^りに共存させるため、本山末寺制度(以下、本末制度)と檀家制度を新たに仏教に取り入れました。

本末制度は、寺院を完全なヒエラルキーの体系にしてその頂点の本山を幕府が統括することで、日本中のすべての寺院が幕府の支配下に入るという非常に合理的な統治体制です。

一方で、幕府はキリスト教の流入を防ぐため、すべての国民の情報を統括し、どの家の誰がどのような行動をしているかを把握する必要があり

ました。そこで目を付けたのが、日本中に存在していた無数の寺院です。すべての家を寺院と紐づけ、個々の家の情報が寺院に集約されるようにし、集約された情報を本末制度を通じて幕府に吸い上げることで、一戸一戸の家の情報がすべて幕府の管理下に入る檀家制度という行政システムを作りました。この仕組みにより、それぞれの家で誰が生まれ誰が死んだか、どこで何をしているかというような情報が寺院に集約されます。その代表的な記録がいわゆる過去帳です。いわば戸籍台帳のようなもので、各寺院(檀那寺^{だんな})に置かれて、自分の家がどこの宗派のどこの寺院(檀那寺)に属しているかというIDを持つようになりました。今でも「お宅の宗旨は何ですか？」と尋ねることがありますが、このようなことは江戸時代より前にはなかったはずです。

明治時代になると、政府により戸籍制度が整備されたため、江戸時代のような戸籍制度的な役割は不要となりましたが、檀家と檀那寺の深いつながりはそのまま残りました。明治政府はその関係性をうまく利用したいという思惑からそれを取り込みました。お上からのお達しを本山寺院から末寺へ、そして檀家へと伝達させることで、国の指導体制を国民に広めるという手段として利用するようになりました。

このように、政治的思惑から作られた制度ではありますが、我々の心に深く浸透しているため、どこかのお寺に属していないと心寂しくて頼りないという思いを日本人は持つようになり

ました。その出発点は宗教的な必然性から生まれたものではないということは1つ重要なポイントです。

日本のお墓文化と檀家

インドで生まれた釈迦^{しやか}の仏教は、輪廻^{りんね}・生まれ変わりを信じていたため、人が亡くなってもお墓を作らない宗教でした。釈迦のように修行を積んで悟りを開いた人だけが仏様になり輪廻から解放され、真の安楽に入ると考えられていました。生き物は皆、輪廻すると考えられていたので、死んだ後の骨には意味がありません。しかし仏道で悟りを開き、輪廻から解放された涅槃^{ねはん}に入った人はもう生まれ変わらないので、この世から消滅します。そのため、悟りを開いた人の場合、その人を偲ぶ物が必要になります。それが遺骨です。このように、仏教においてもともと大切にされたのは悟った人の骨だけでした。

ところが、大乘仏教が広がり、誰もが仏になれるという思いが強くなると、あらゆる人の遺骨には意味があるということになり、亡くなった人の遺骨を祀^{まつ}るために墓を作るようになりました。それに加えて、中国の儒教や道教における先祖供養を非常に大切にする考え方と結びつくことで、ご先祖様を残すシンボルが必要となり、遺骨を納めたお墓を大切にする風習ができました。つまり、骨を祀るお墓は本来的に仏教が持っていた考え方ではありません。

遺体を火葬にするという風習は仏教とともに日本に伝わりましたが、火葬はお金のかかる方法だったため、伝来当初にお墓を作っていたのは天皇貴族だけでした。その後次第に庶民の間にも広がりましたが、現在のように死んだら皆が墓を作って骨を祀って拝むようになったのは、江戸時代に檀家制度が確立してからです。

檀家制度により、遺骨を檀那寺内に建てた墓に祀り、住職が定期的に管理して供養するシステムが定着しました。四十九日や一周忌などの年忌法事と呼ばれる定期定例的な行事も、ほと

んどが江戸時代に出来たものです。

お布施とは

もともとお布施とはインドの風習で、「人に物をあげるのは良い行い(善行)」というのが基本的な考え方です。これは心が優しいからお布施をするというようなチャリティではありません。良い人や優れた人にお布施をすると、その相手が良い人であればあるほど自分自身の善業が積み上がり、次に生まれ変わるときに、より良い世界に生まれ変われるという、将来の果報を見据えての行為です。つまり、お布施というのは優れた人にあげるから意味があるのであって、誰にあげてもよいという話ではありません。清らかで誠実な僧侶にお布施をするからこそ自分たちへの大きな果報が期待できるという考え方です。

日本では、お布施は修行や利他行^{りたぎょう}であり、他人を助けて幸せにするものだと言われ、都合よく言われることがあります。本来は違います。お布施は修行ではありません。あくまで自己の将来の利益を願って行う、投資のような行動なのです。ですから、つまらない人にお布施をすることは、無駄な行いだということになります。

よく「お布施したのにあの僧侶は高級車に乗って贅沢^{ぜいたく}して」と言う人もいますが、その住職が嫌ならお布施しなければよいのです。その住職がいる寺院の檀家をやめればよいのです。お布施する相手を自分で決める。お墓をどうするのか、檀那寺はどこにするのか、どの僧侶にお布施するのか、金額はいくらにするのか。すべては布施をする側に選択権があります。より良い布施の対象を選ぶ、ということで、日本の仏教はよくなっていくということもよく理解しておいてください。

檀家と檀那寺の関係の変化

－墓じまいについて

1. 檀家制度の崩壊

檀家制度は、江戸時代に成立したのですが、

そこには「檀那寺と檀家(家)は同一地域にあって、その土地から動かない」という大原則がありました。ところが、特に第二次世界大戦後、都市への人口集中や核家族化により、「家が動く」ということが起き、この変化が檀家制度崩壊の一番の要因となりました。

それでも今現在はまだ檀家制度が残っており、檀那寺との関係をどうしたらよいのか悩んでいる方がたくさんいます。それは、檀家制度を自分の生活基盤としてどれくらい重視しているかという問題です。檀那寺との繋がり^{つな}がなければ将来不幸になるのかということ、仏教には本来そのような考え方はありません。本来の原理的な意味で仏教がどういうものであったかを考えると、檀家制度から外れても構いません。

しかし、江戸時代から続くものとして、檀那寺がなく、何ら宗教的な拠り所もなく死んでいくことを寂しく思う方もいます。そうした方は、檀那寺が遠くにあっても、いざというときにはその住職に来てもらい、葬儀を執り行ってもらいたいという気持ちがあるでしょう。これは社会的に一元化してこうだといえることではありません。一人一人の感性に基づいた判断になるはずです。

これから檀那寺とどう付き合っていくのかについては、自分自身で良いお坊さんを選び、宗教的な拠り所にするのが一番良い考え方だと思います。そうすると檀那寺との縁を切ることになり、先祖や過去帳のことを思うと不安を感じる方もいるでしょうが、自分が選んだ本当に頼りがいのあるお坊さんの下で宗教生活を営んでいくというかたちは、これからの時代のまっとうな宗教の在り方だと考えます。

2. 墓の改葬、墓じまい

インド仏教では、一般の人の骨を祀るための墓はありませんでした。しかし、日本人は心情的に骨を移すことに抵抗があります。お墓を移すときには、お墓から霊を抜くお霊^{しやう め}抜きをします(この儀礼の呼び名は宗派によっていろいろで

すが)。そして新たな場所にお霊入れをすることで新たなお墓になるわけで、場所を移すことに関しては宗教的な縛りはないはずです。

昨今、墓じまいが進んでいますが、これは時代の流れです。ケースごとに考える必要があります。墓を残したいが、自分の死後墓を世話してくれる人がいない場合、檀那寺に管理をお願いするしかありません。管理費を納めて管理をお願いする方法です。これがお墓を一番大切にする人のケースです。

そうでない人は、墓じまいをして、お墓の代わりに家の中に位牌^{いはい}を置く、位牌を継ぐ人がいない場合は、位牌そのものをお寺に納める方法もあります。これもある種、永遠に供養してもらう1つの方法です。

3. 新たなお墓のかたち－インターネット墓

もうお墓は不要という人は、墓じまいして構いません。私は最近、これからの墓としてインターネットを使うことを提言しています。お墓の一番の意味は亡くなった方がどんな人であったかということの後々に残していく記録です。従来は壊れることがなく継続性のある物体として石に彫っていました。今は生前の声や姿、あるいは来歴などの存在証明は全部インターネットに残せます。墓じまいをしたいけれど、自分やご先祖様の情報を残したいと考えるなら、インターネットを使うのが新しい墓のかたちになるでしょう。

祖先・故人の新たな弔いのかたち －これからの寺院・僧侶が担うべき役割とは

これからの葬儀に関しては、お寺やお坊さんが主役になる時代はもう終わりといえます。お坊さんがいなくてもお葬式はできます。しかし、大事な人、家族が死んだときにはきちんとしたけじめが必要だと考える人も多いと思います。そうしたときにお坊さんが、人が生きる／死ぬとはどういうことか、あるいは今の時代に私たちが生きている苦しみはどうしたら消すことが

できるのかといった、実学では語れない精神性の立場で人を救うような話をしてくれると心が安らぎます。

単なる儀礼の執行者としてお経を唱えるだけではない、人が1人死んだときしっかりしたけじめの付くような、悲しみを癒してくれるような話をしてくれるお坊さんが葬儀に来る、そういう概念が定着すればお葬式をする遺族、お坊さんそれぞれに大きな意味を持った価値観が出てくると思います。

檀信徒と寺院の関係は、消費者と事業者の関係で行われる普通の消費活動とは異なります。仏教に興味のない人や、期待をしていない人にとっては、単なる儀礼であり、僧侶とは儀礼だけを行うセレモニー屋でいいわけです。その場合は、普通の商売と同じですから、ちゃんと料金設定してくれるお寺を選べばいいと思います。

しかし、世の中には資本主義的なモノの売買だけでは成り立たないような精神性という側面があります。困窮しているときに支えてくれる言葉をかけて生きる力を与えてくれる人がいれ

ば、これは心を救うという大切な行いです。苦難や苦痛に見舞われ、救いを求める人に対する力づけと、セレモニー屋としての仕事をこなす経済活動とは、違う次元の話です。

本当に困っていて心の支えが欲しいとき、話を聞いてくれる、そうした僧侶を求める人も世の中にはいます。そうした人は、自分が救われた分だけお礼をしたいと願います。お坊さんも本当の僧侶としての気概と自負で人を助けようとしているため、こういう関係で成り立つ檀信徒と寺院の関係もあります。

消費活動としての寺院との関係とは別に、深い人間関係の中に成り立つ関係性もある。実はそうした側面が残っていくことが、仏教がこれからも続いていくということの本当の意味になると思います。こうした仏教の本義を知ってもらおうというのはとても大切です。

※本稿は佐々木閑先生への取材内容を編集部でまとめ、先生の加筆・確認を経て作成しました。

新刊『多様化・重層化するキャッシュレス決済』のご案内



好評発売中

定価 1,540円(税込)

ポイント1

執筆者はキャッシュレス決済の専門家である山本正行氏

日々進化するキャッシュレス決済のしくみやサービス、さらには消費生活相談において相談者から聴き取りする際の注意点などについても分かりやすく解説しています。

ポイント2

ウェブ版「国民生活」の人気連載を書籍化

消費生活相談業務に携わる方、消費生活相談員の資格取得を目指す方におすすめです。また、キャッシュレス決済を学ぶための入門書としても最適な内容となっています。



ご注文は

https://www.kokusen.go.jp/book/data/cashless_guide.html

https://www.kokusen.go.jp/book/data/mousikomi_cashless.html

QRコードは、株式会社デンソーウェブの登録商標です。

詳しい内容は



B5判/80ページ

フルカラーの誌面構成
図表も多用しています

【編集・発行】

©2024 独立行政法人国民生活センター
〒108-8602 東京都港区高輪 3-13-22
TEL 03-3443-6215 (編集担当)